

|       |  |    |    |
|-------|--|----|----|
| 名前    | 井口智彰 (IGUCHI, Tomoaki)   | 学年 | D3 |
| 研究分野  | 英語語法研究、認知言語学、応用言語学(英語教育)   |    |    |
| キーワード | コーパス、イディオム、多義性、プロトタイプ、文法化  |    |    |
| 代表的業績 | <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 'A Corpus-Based Analysis of <i>Take</i>: With Special Reference to Its Linguistic Formal Types,' 2011 年, 修士論文 (関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科提出)</li> <li>2. 「Take (Have, Give) a V 構文の意味・機能分析」『日本認知言語学会論文集』第 11 巻 (2011 年)</li> <li>3. 「『have a V 構文』における構文の創造的拡張」『日本認知言語学会論文集』第 13 巻 (2013 年)</li> <li>4. 'Grammaticalization and Idiomatization as Semantic Extension: With Special Reference to <i>Take</i>' 『言語コミュニケーション文化』第 11 巻 (関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会研究紀要) (2014 年)</li> <li>5. 「語彙と構文による意味の創発－take の項はなぜ双方向に移動できるのか?－」『言語コミュニケーション文化』第 12 巻 (関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会研究紀要) (2015 年)</li> <li>6. 「使用依拠からの軽動詞構文再考－give a V 構文に関して－」『日本認知言語学会論文集』第 15 巻 (印刷中)</li> </ol> <p>研究ノート</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「コーパスを使った英語語彙の調査」『広島県高等学校教育研究会英語部会会誌第 47 号』(2013 年)</li> </ol> <p>口頭発表</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 'How to Teach Basic English Verbs Effectively: Theoretical and Practical Implications,' 全国語学教育学会(JALT)2009 年全国大会, 2009 年 11 月 21 日, 於 グランシップ静岡.</li> <li>2. 「Lexical Network Theory の批判的検討」関西英語語法文法研究会, 2010 年 12 月 18 日, 於 関西学院大学.</li> <li>3. 「Semantic Analysis of Take」京都大学人間環境学研究科自主ゼミ, 2011 年 2 月 10 日, 於 京都大学.</li> <li>4. 「語彙と構文の接点: take の項の移動の方向性に関する考察」京都大学人間環境学研究科自主ゼミ, 2011 年 8 月 18 日, 於 京都大学.</li> <li>5. 「語彙と構文の合成による意味の創発: take の項はなぜ双方向に移動できるのか?」英語語法文法学会第 19 回大会, 2011 年 10 月 15 日, 於 奈良女子大学.</li> <li>6. 「have a watch (of)は容認可能か?－構文の意味拡張に関する考察－」関西英語語法文法研究会, 2012 年 7 月 14 日 於 関西学院大学</li> <li>7. 「have (take) a V 構文の語用論的考察」関西英語語法文法研究会, 2012 年 12 月 15 日 於 関西学院大学</li> <li>8. 「英語多義動詞の意味拡張に関する考察－文法化・イディオム化・構文化</li> </ol> |    |    |

|       |   |
|-------|---|
|       | <p>の視点からー」第45回中国地区英語教育学会島根大会、2014年6月21日 於 島根大学</p> <p>9. 「Take/have a V 構文における話者の事態把握について」関西英語語法文法研究会、2014年12月13日 於 関西学院大学</p> <p>10. 「英語軽動詞構文の制約条件に関する考察」福岡認知言語学会、2015年3月26日 於 西南学院大学</p>  |
| メッセージ | <p>英語に限らず、使用頻度の高い基本語彙の多くは多義的であり、当該言語の非母語話者にとってそれらの語を適切に使い分けることは容易ではありません。どうすれば、多義語が効率的に習得できるようになるのでしょうか？ この疑問に明確な答えを出したいと思ったのが、研究を始めたきっかけです。修士論文では、多義語の語法を実証的に記述・分析する必要があると考え、コーパスに依拠した語法研究を中心に取り組みました。しかしそれだけではなく、話者がどのように事態を把握して、それを言語表現として表出させているか、認知言語学的な視点から、言語使用の内在的なメカニズムの解明にも併せて取り組む必要があると考えているところです。</p> |
| 更新日   | 2015年4月30日  |